

課題名 安全な森林環境教育を目指して ～ボランティアと連携した取組事例から～

高尾森林ふれあい推進センター 久保 武典 木皿 仁志

1 課題を取り上げた背景

近年、森林環境教育への関心などから当センターが実施する森林体験学習への申込みが増えつつあります。森林体験学習においては、何よりも安全に実施することが求められますが、特に都市部で森林とふれあう機会が少ない児童生徒にとっては、体験学習での新鮮さや楽しさがある反面、林内では怪我や事故などが起こり得ることを体験活動の前に分かりやすく説明する必要があります。このため、児童生徒に対し単に「危ない」と言うだけでなく、林内で起こり得る「注意点をイメージ」させ、体験学習における児童生徒の成長の特性を踏まえた安全対策の進め方についてボランティアと連携した取組を報告します。



写真1 木の重さを体験

2 具体的な取組

森林体験学習において、林内での注意点を周知するためには、あらかじめ児童生徒に対し、何が「危ない」のかイメージさせる必要があります。特に児童生徒の場合、大人とは違い説明に対する理解力が異なります。このため、林内での危険性が想定されることを写真やイラストなどを活用して



写真2 ボランティアと職員との打合せ

視覚的に伝える方法や、丸太切り体験を通じて木の重さや硬さなどを安全に体感できる手法を試みました。また、ボランティアに対する年度初期の安全教育の指導、森林体験学習での情報共有化、日頃のコミュニケーションなどを通じて安全対策に取組みました。

3 取組の結果

児童生徒に対し、林内での注意点を写真やイラストを活用したほか、特に丸太切り体験では木の重さなどを体験させ、視覚のほか体感でも学ぶことができることから「予想よりも木は重かった」などの反応があり、具体的なイメージが伝わりやすくなりました。これにより言葉だけの注意喚起とは違い、児童生徒はルールや危険性を強く意識するようになり、注意をよく守るようになったほか、お互いが注意し合う場面も見受けられるようになりました。

また、ボランティアとの連携においては、毎年度当初（4月）に会員に対する児童生徒の行動特性等を踏まえた安全教育を実施し、森林体験学習では互いに受け持った各班の状況や注意点を率先して共有するようになり、職員や会員がお互いコミュニケーションを深めるきっかけにもなりました。これにより、児童生徒の様子や注意点等が速やかに全体に共有されるとともに、毎回の森林体験学習実施後の振り返りを通じて次回の反映にもつながり、これまで児童生徒においては、怪我や事故が発生することなく取り組むことができました。

4 まとめ

児童生徒が林内で安全に活動するためには、参加する年齢層の特性等を踏まえ、林内ではどのような行動が危険なのかあらかじめイメージを持たせることが効果的です。特に高学年（4～6年生）は判断能力が育ち、集団規律を理解できるようになるとともに、運動能力が向上していることから、危険回避の仕方や自分の身は自分で守る意識を持たせることが重要です。また、その特性等があることをボランティアと共有し、森林体験学習での振り返りを重ねつつ取り組むことが安全に進める上で効果的であることが分かりました。